

ような人たちの自由を増やす工夫も考えなければならぬ。

多数派はすでに配慮をされているのだ

「配慮の平等」という理念をもう少し敷衍する。

「配慮を必要としない多くの人々と、特別な配慮を必要とする少数の人々がいる」という強固な固定観念がある。しかし、「すでに配慮されている人々と、いまだ配慮されていない人々がいる」というのが正しい見方である。多数者への配慮は当然のこととされ、配慮とはいわれない。対照的に、少数者への配慮は特別なこととして可視化される。

たとえば、階段とスロープを比較してみよう。なぜ階段は配慮でなくスロープは配慮なのか。試しに階段を壊してみればよい。階段がなくても二階に上がれるのは、ロッククライマーと棒高跳びの選手ぐらいのものだ。だったら階段だって配慮ではないか。

講演では、講演者はレジュメを用意するように求められる。分野によってはスライドを見せるのが常識となっている。かくいう私も情報系の講演ではつねにパソコンでスライドを見せる。これらもまた配慮なのだが、それをしないと受講者は手抜きと感ずる。一方聴覚障害者のために要約筆記や手話通訳を用意するシンポジウムや講演会は、きわめて例外的である。点字のレジュメが配られることも同様なきわめて例外的だ。

だが、それらが提供されれば、障害者に配慮しているセミナーだと、一般の受講者は感心したりする。これは論理的にはおかしいことだが、不思議だと思ふ人はほとんどいない。自分への配慮は当然のことであり配慮とは思わないが、他者への配慮は特別なことと感じてしまう。そして、その非対称性に気づかない。

市場を通して提供される配慮は、ユーザビリティと呼ばれサービスと呼ばれ、けっして配慮とはいわれない。一方、市場に任せておいても提供されない配慮は、公的セクターにより部分的に提供され、残り人は人々の善意や優しさに期待がかけられる。

いずれにせよ、それらは特別な配慮とされる。市場は、非良心的な行動が褒美を受け、良心的に仕事をするとは経済的に破滅するメカニズムだというのに、人々は市場メカニズムが作動して実現したことは「当然のこと」とみなし、公的セクターやNPOなどにより実現したことは「特別なこと」「善意の証」と考える。奇妙なことだが多くの人々はこの枠組みを疑わないし、市場のそうした性質に気づかないか、気づいてもやむをえないとしか言わない。

さらにはこうも言うことができる。多数者ほど配慮され、少数者ほど配慮されないというだけでなく、「できる人ほど配慮され、できない人ほど配慮されない」、あるいは「強い人ほど配慮され、弱い人ほど配慮されない」と。さらにこういうことにも気づく。「強い立場にある人ほど配慮を要求でき、弱い立場の人ほど配慮を提供しなければならない」。

「すでに配慮されている人々と、まだ配慮されていない人々がいる」という視点を獲得したときに、平等についてのセンスは一気によくなる。

私は、誰もが、そこそこ元気に、自由に、つつがなく暮らせる社会がいちばん良い社会だと思う。ハイリスク・ハイリターンの人生が好きだという人もいるだろう。もちろん安心して暮らせる社会でもそのような生き方は可能だ。エベレスト登山でもヨットでの世界一周でも、できる人、やりたい人は自由にやってみてもらってかまわない。そしてお好み通り、それはぜいたくな嗜好として配慮の平等の外に置かれることになるだろう。

人生は一回しかないのだから、大方の人は私の主張に賛同してくれると思う。「誰もがそこそこつつ